

5) 汽水・淡水魚類

①概説

青森県には、岩木川と馬淵川という2つの大河川のほか、中小規模の河川が多数存在している。また十三湖と小川原湖という汽水湖、淡水の十和田湖を抱えている上、特に津軽平野には多数の溜池がある。このように本県の流水・止水とも陸水環境は多様で、魚類に豊かな生息場所を提供している。しかし、本県に自然分布している淡水魚・汽水魚の種数は決して多くない。とりわけ、淡水中で一生を送る純淡水魚は種数が少なく、このことが、多数の外来魚種の定着を許してきた一因となっており、外来種の多いことは現在の本県の汽水・淡水魚類相を特徴付けている(佐原, 2003)。

2007年、環境省は汽水・淡水魚類の新しいレッドリストを公表したが、そこには1999年版からほぼ倍増する種数が掲載されていた。これは全国的な危機的状況の現れといえる。ここでは本県の汽水・淡水魚類の生息を脅かす要因を整理しておく。

流水の場合から見ていこう。まず、河川改修の問題がある。魚類は一生を通して形態・生態が大きく変化し、それに対応して適した住み場やエサもまた変化する。とりわけ、生活史のうちで河川と海とを往復する「通し回遊」を行う魚類では、海での生息環境も含めて様々な住み場を必要とする上、これらの場所間は自由に移動可能でなければならない。

改修によって淵と瀬の交代というメリハリがなくなり、またコンクリート護岸によって岸辺の浅場や植物帯が失われると、魚類の生息条件が劣化する。さらに落差工など横断構造物は移動を妨げ、魚類の生息条件を危うくする。この意味で、なるべく自然な河川のあり方こそ望ましいと考えるように人々の意識が高まってきたことは喜ばしいが、関心は主に大河川に向けられており、中小の河川についてはいま一つである。カンキョウカジカやルリヨシノボリ、シマヨシノボリなどは、海から遡上してすぐに中流域に到達できるような、下流域の発達しない中小規模の河川を主な住み場としているが(竹内ら, 1985)、人々の関心がこれらの河川に向けられることは少ない。これは淡水魚の保全を考える上での盲点といえる。

チチブやヒモハゼ、アカオビシマハゼなど河口部に特徴的な汽水魚は生息域が狭い。また、海から河川に遡上して繁殖するイトヨでは、河口部の緩流域で植物の繁茂する場所を必要とする。河口部は人口がしばしば密集する場所であり、改変が行われやすい。このような魚種は生息基盤が脆弱と考えられる。水田地帯の代表魚種にあげられるメダカには河川感潮域にすむ個体群があり、これは日本の平野部に水田が広がる以前の生活史のあり方を留めていると思われるが、このようなメダカ個体群も付け加えておこう。

人の関心を集めにくいという意味では、河川とも言えない細流にすむスナヤツメの場合がある。低山地の細流は水田の水路として利用されていることも多いが、水路のコンクリート化はスナヤツメにとって脅威である。以上のように、大河川だけでなく様々な流水に目を向けていくことが保全のために必要である。

河川以上に、止水の場合にいっそう顕著なのが外来種問題である。県内にはたくさんの魚種が国内外から持ち込まれてきた。国内の他地域からの外来魚はモツゴやカマツカ、オイカワ、タモロコなど枚挙にいとまない。これらが在来魚にどのような悪影響を与えたかは、交雑によってシナイモツゴを危機に追い込むモツゴのほかはあまり分かっていない。

大きな問題は国外からの外来魚である。県内では1990年代から顕著になってきた、オオクチバスによる食害の問題(東, 1998ほか)はいくら強調してもしすぎることはない。タナゴやヤリタナゴなど、止水にすむ小型魚種は場所によって壊滅的な被害を受けている。やはり北米からの外来魚ブルーギルが加わると、事態はいっそう深刻化する。

外来種問題に加えて、植物帯の破壊やコンクリート護岸、水質汚染など、魚類の生息環境の劣化は止水の場合にも懸念される。概して河川に比べて関心が低く、また調査も不十分な溜池にもっと注意を向けることが今後必要であろう。

(佐原雄二)

②本文

サケ目 サケ科

EX

和名 イトウ

環境省：絶滅危惧類ⅠB類

学名 *Hucho perryi* (Brevoort)

[形態的特徴] 日本最大の淡水魚で、成長すると1mを超えることもある。

[選定理由] 本種はかつて県内でも自然繁殖し、小川原湖では漁獲の対象ともなっていて、主に刺し網で漁獲されていた。1892年には同湖で約1トンの漁獲があったというが、現在では絶滅している。乱獲の指摘もあるが、絶滅の理由は必ずしも明らかでない。

[分布と生態の概要] 現在、国内では北海道の東部・北部に生息に限られるが、かつてはもっと広く分布しており、県内にも自然繁殖していたが絶滅した（日下部, 1988）。

[生存に対する脅威と保存対策] 本種の生態は比較的分かっておらず、従って減少の要因も詳細には分かっていない。河川環境の悪化などが指摘されている。

[特記事項] 本種はかつて小川原湖に生息し、漁獲の対象にもなっていた。本種の絶滅した原因は明らかでない。その後もごくまれに川内川や大畑川に本種が迷入することがある。

（佐原雄二）

コイ目 コイ科**A**

和名 シナイモツゴ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Pseudorasbora pumila pumila* Miyadi

【形態的特徴】 紡錘形の体を持つ、最大でも全長8 cm程度の小魚である。同属のモツゴに酷似するが、体全体がもっとズングリしている。モツゴとの決定的な違いは、側線が不完全なことである。繁殖期にオスは体色が黒くなり、頭部には追星を生じる。

【選定理由】 本種は分布域が元々狭い上に減少が著しく、減少の主要因であるモツゴの分布拡大やオオクチバスの移入などの脅威も依然大きいため選定した。

【分布と生態の概要】 日本固有種で、かつては関東から東北各地に分布していたが、関東ではすでに絶滅した。県内では現在は青森平野でのみ生息が知られており、主に山地に近い溜池などの止水に生息し、雑食性である。繁殖の際にオスは石など硬いものの周辺を縄張りとして守り、メスはこの表面に産卵する。モツゴとの雑種は不妊となる。

【特記事項】 青森市の又八沼では市の天然記念物に指定されている（2000年）。

(佐原雄二)

コイ目 コイ科**A**

和名 ヤリタナゴ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel)

【形態的特徴】 最大でも全長10cm程度の小魚である。日本産タナゴ類の中では体高の低いほうである。1対のひげをもつ。繁殖期にはオスの前半部が赤みを帯び、尻ビレの外縁も赤くなる一方、腹部は黒くなる。

【選定理由】 溜池の減少やオオクチバスの移入などによって本種は減少した。本種をとりまく状況は現在も依然として厳しいため選定した。

【分布と生態の概要】 国内では北海道と南九州を除く各地に分布するが、県内では津軽平野にのみ生息が確認されている。流れの緩い河川や溜池にすむ。繁殖の際にはマツカサガイなど二枚貝を必要とする。

(佐原雄二)

コイ目 コイ科**A**

和名 タナゴ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Acheilognathus melanogaster* Bleeker

【形態的特徴】 日本産タナゴ類の中では体高が低い。最大でも全長10cm程度の小魚である。繁殖期にオスの腹は黒く、尻ビレの外縁は白く彩られる。

【選定理由】 本種の減少にはオオクチバスの移入が大きく関わっている。本種をとりまく状況は依然として厳しいため選定した。

【分布と生態の概要】 本種は日本固有種で関東以北の本州太平洋側にのみ分布し、県内でも生息域は太平洋側の池や河川に限られる。タナゴ類の中では、流水中で見られることが比較的多い。繁殖の際には二枚貝を必要とする。

(佐原雄二)

ナマズ目 ギギ科**A**

和名 ギバチ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Pseudobagrus tokiensis* Döderlein

[形態的特徴] 全長で20cmを超えることがある。ナマズに似るが背ビレや尾ビレが発達している。近縁種のギギとは異なり、尾ビレ後縁の湾入はごく浅い。

[選定理由] 県内の分布域は馬淵川水系の中流域に限られ狭い上、汚染や河川改修など生息条件の悪化に弱い。

[分布と生態の概要] 日本固有種で、関東以北の本州に分布し、本県が北限である。清澄な河川に住み、夜行性で主に水生昆虫などの動物質のエサをとる。

[特記事項] 近年、本種に似たギギが国内外来種として本県内に移入され繁殖している。

(佐原雄二)

カサゴ目 カジカ科**A**

和名 ハナカジカ

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（東北地方）

学名 *Cottus nozawae* Snyder

[形態的特徴] 全長15cmほどになる。体色は褐色で斑紋がある。腹ビレには数本の黒い横斑を持つ。

[選定理由] 県内での分布域は極めて狭い。本種の生息を脅かすものは河川改修と、競争的な種の不用意な移入である。

[分布と生態の概要] 日本固有種で、北海道と北東北の一部に住み、河川中で一生を過ごす。県内での分布はごく狭く、馬淵川水系の一部の上流域に限られる。水生昆虫など動物質のエサをとる。

[特記事項] 近年、馬淵川水系の別支流にカジカ大卵型が放流されたようだが、将来それが本種の生息域に分布を広げた場合に深刻な問題を引き起こす可能性がある。

(佐原雄二)

ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科**B**

和名 スナヤツメ北方種

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lethenteron* sp. 1

[形態的特徴] 全長20cmほどで吸盤状の口を持ち、あごがない。幼生は成魚とは異なり眼がなく口も吸盤状ではない。

[選定理由] 本種の生息には礫底部と泥底部とが近距離で揃っていることが必要なうえ、主要な生息場所の水路は改修を受けやすいこと、また本種が夜行性で目立たず、関心ももたれにくいことから生息状況の悪化が懸念される。

[分布と生態の概要] 国内では北海道、東北地方に生息する。国外では朝鮮半島から沿海州、中国北部に分布する。幼生はアンモシーテスと呼ばれ、夜行性で日中は砂底にもぐり、夜間に泥中の有機物を摂る。成魚は繁殖期に礫底部に集団を作り、このときは日中に観察できる。流れの緩い河川や水路に生息する。

[特記事項] スナヤツメ南方種と分離、別種とされた。県内に生息するのは北方種である。

(佐原雄二)

ダツ目 メダカ科**B**

和名 メダカ北日本集団

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Oryzias latipes* subsp.

[形態的特徴] 最大でも全長4cmほどの小魚。背中側が褐色、腹側が銀白色で、上から見ると背中の中の黒いスジが目立つ。

[選定理由] 本種の減少要因は、水田・水路では圃場整備であり、溜池では池自体の減少やオオクチバスなどの移入である。また、色変わり品種ヒメダカなどの移入による遺伝子汚染も懸念される。

[分布と生態の概要] メダカの国内での分布は本州以南であるが、北日本集団の分布は本県から日本海側を経て若狭湾までである。平地の水田・水路、溜池、河川の緩流域などに生息し、水面を群泳する。雑食性で動植物プランクトンや小型底生動物などを食べる。

[特記事項] 南日本集団に比べて北日本集団は遺伝的に均質である。

(佐原雄二)

トゲウオ目 トゲウオ科**B**

和名 イトヨ (降海型)

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群 (本州)

学名 *Gasterosteus aculeatus aculeatus* Linnaeus

[形態的特徴] 全長8cm程度。背ビレの前に3本、胸ビレに1対のトゲを持つ。体側にはウロコの変形した鱗板をもつ。

[選定理由] 本種の繁殖地である河川下流や河口部の緩流域は、人口密集地帯であることが多く、改修によって破壊を受けやすい場所でもある。

[分布と生態の概要] 北半球の亜寒帯・温帯に広く分布し、国内では山口県・利根川以北とされる。海と河川とを往復する通し回遊魚であるが、本種には陸封型もある。繁殖期に遡上したオスは、腹部が赤く背は青くなり、流れの緩い水底に縄張りを形成し、植物片を集めて巣を造り、メスを誘い入れて産卵を促す。孵化後しばらくまでオスが保護する。小型の底生動物などを食べる。

[特記事項] 十和田湖や十二湖には本種の陸封型がすむが、いずれも移入されたものと考えられる。

(佐原雄二)

トゲウオ目 トゲウオ科**B**

和名 トミヨ属淡水型

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（本州）

学名 *Pungitius pungitius* Linnaeus

[形態的特徴] 全長5 cm程度。背中にノコギリの歯状のトゲが並ぶ。

[選定理由] 本種の主要生息地は溜池であるが、池自体の減少や水質の悪化、外来魚による食害が減少要因として懸念される。

[分布と生態の概要] 北半球の寒冷地に広く分布する。本県での分布は比較的広いが、津軽平野側での生息地はあまり多くないようである。池や河川緩流域に生息する。繁殖期にオスの体色は黒くなり、水草の間に小鳥の巣のような巣を造って、メスが産卵した後も孵化するまで保護する。

[特記事項] 以前は体側の鱗板の連続が完全なものを「トミヨ」、不完全なものを「イバラトミヨ」として区別されていた。本県ではトミヨが比較的海に近いところに、イバラトミヨが内陸に分布している（竹内ら, 1985）が、混生している場所もある（青森県, 1978）。

（佐原雄二）

カサゴ目 カジカ科**B**

和名 カジカ小卵型（ウツセミカジカ）

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Cottus reinii* Hilgendorf

[形態的特徴] 縦扁した形態を持ち、体側には暗色の斑紋がある。ハナカジカやカンキョウカジカと異なり腹ビレに斑点はない。

[選定理由] 移動を妨げる横断構造物を河川中に造られると大きな障害となる。同じ河川に大卵型が共存する場合、本種の減少は見逃されやすい。

[分布と生態の概要] 日本固有種で、本県を含む本州・四国の太平洋側に分布する。本種は両側回遊を行い、孵化した仔魚が直ちに流下し、海で短期間を過ごした後に河川に遡上し、後は河川中で生活を送る。水生昆虫などの動物を食べる。

[特記事項] 以前は琵琶湖産のものに限って「ウツセミカジカ」の呼称が用いられていた。

（佐原雄二）

カサゴ目 カジカ科**B**

和名 カジカ中卵型

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Cottus* sp.

[形態的特徴] カジカ小卵型に酷似する。

[選定理由] カジカ小卵型と同様、両側回遊を行い、従って河川内横断構造物の出現は大きな打撃になる。カジカ大卵型が共存すると本種の減少は看過されやすい。

[分布と生態の概要] 本種も日本固有種で、本州（日本海側）・四国・九州に分布する。孵化した仔魚が直ちに流下し、海で短期間を過ごした後に河川に遡上し、後は河川中で生活を送る。水生昆虫などの動物を食べる。

（佐原雄二）

ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科**C**

和名 カワヤツメ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lethenteron japonicum* (Martens)

鰓を持たない。7つの鰓穴を眼に見たて、本当の眼と併せて「八つ目」といわれる。生活史の中で海と河川とを使い分ける通し回遊魚で、アンモシーテス幼生は泥中の有機物などを摂るが、変態後の若魚は海に降り、他の魚の体液を吸って成長する。夏に海から河川に遡上し、翌年の繁殖期までエサを摂らないで過ごす。生息のためには河川と海の双方の環境が良好であることを必要とする。

(佐原雄二)

コイ目 コイ科**C**

和名 エゾウグイ

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（東北地方）

学名 *Tribolodon sachalinensis* Nikolsky

ウグイに似るが、ウグイほど大きくならない。また繁殖期に体側に出現する赤色の縦線もウグイほど鮮やかでない。さらに尾ビレ後縁がウグイとは異なり内湾しない。国内では北海道のほか本州北部の河川上流部に生息する。雑食性で、海へは降りず河川内で一生を過ごす。生息を脅かすのは河川改修などの環境変化である。

(佐原雄二)

スズキ目 ハゼ科**C**

和名 シロウオ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Leucopsarion petersi* Hilgendorf

半透明の体を持ち、ハゼの仲間としては例外的に遊泳的な生活を送る。基本的に海で生活し、繁殖のために河川に遡上する。河川下流の伏流する礫底部で産卵する。本種には海と河川との双方が良好でなければならないので、環境の変化には敏感である。県内では日本海側の中村川、陸奥湾では蟹田川や野内川、川内川などで漁獲されている。

(佐原雄二)

スズキ目 ハゼ科**C**

和名 ヒモハゼ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Eutaeniichthys gilli* Jordan et Snyder

全長4cm程度で、小さな頭部など、ハゼの仲間としては変わった形態を持つ。汽水の砂底を好んで生活する。知られている限りで本県は分布の北限であるが、そのような生息条件を持つ場所は県内では限られているため、生息の基盤が脆弱である。

(佐原雄二)

カサゴ目 カジカ科**C**

和名 カンキョウカジカ

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（東北・北陸地方）

学名 *Cottus hangiongensis* Mori

カジカに似るが、体側には小さな緑褐色の斑点が多数ある。北海道と北日本に生息し、国外では朝鮮半島東部や沿海州に分布する。両側回遊を行い、仔魚は海に流下して短期間を経てから河川に遡上する。下流域の発達した大河川は生息に不向きで、むしろ中小規模の河川に特徴的である。底生動物を主食とする。河川環境の人為的改変や、このような河川への人の関心が比較的薄いことも生息を危うくする要因である。

(佐原雄二)

カサゴ目 カジカ科**C**

和名 カジカ大卵型

環境省：準絶滅危惧

学名 *Cottus pollux* Günther

体型や色彩はカジカ小卵型や中卵型に酷似するが、生活史は異なっており海へは降りず、卵から孵化すると直ちに底生生活に入る。主に夜間に活動し、水生昆虫など動物質のエサをとる。河川改修などの環境変化によって生息条件は悪化している。

(佐原雄二)

コイ目 コイ科**D**

和名 キンブナ

学名 *Carassius auratus* subsp. 2

環境省：準絶滅危惧

近縁種のギンブナや国内外来種のゲンゴロウブナなどのフナ類の中では、体高が低く、ウロコの後端が明るく縁取られるなどの違いがあるが、総称して「フナ」とされることも多い。溜池や流れの緩い水路に生息する。ギンブナに比べて少ないうえ、外来魚の移入などで溜池の生息条件は悪化しつつある。

(佐原雄二)

スズキ目 ハゼ科**D**

和名 アカオビシマハゼ

学名 *Tridentiger trignocephalus* (Gill)

環境省：該当なし

尾ビレに赤い縞を有するハゼの仲間。かなり塩分の濃い汽水の、礫底を好んで生息する。県内では日本海側や陸奥湾の河口で記録されている。かつて近縁種シモフリシマハゼと一緒に「シマハゼ」とされていたこともあり、本種の生息状態の詳細は不明である。

(佐原雄二)

カサゴ目 カジカ科**D**

和名 アユカケ (別名カマキリ)

学名 *Cottus kazika* Jordan et Starks

環境省：絶滅危惧II類

大型のカジカの仲間で、小型魚類などを食べる。繁殖に際して成魚は海へ降り、沿岸で産卵する。孵化後はしばらく海中で過ごした後に河川に遡上する。日本固有種で、本州の日本海側に比較的多い。以前は県内には確かな記録はなかったが、長崎ら (1999) その他の報告以来、確認されることが増えてきた (青森県鯨ヶ沢県土整備事務所, 2004 など)。

(佐原雄二)

コイ目 コイ科**D**

和名 マルタウグイ

学名 *Tribolodon brandti* (Dybowski)

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群 (本州日本海側)

ウグイ類の中では大きくなる種で、最大全長40cmに達する。コイ科魚類の中では例外的に、もっぱら海に生息し繁殖時に河川に遡上する。底生動物などを食べるという。

(佐原雄二)

スズキ目 ハゼ科**D**

和名 チチブ

学名 *Tridentiger obscurus* (Temminck et Shlegel)

環境省：該当なし

かつて本種は近縁種ヌマチチブと一緒に「チチブ」とされていた。本県で河口部に普通に見られるのはヌマチチブであり、本種の生息状況は必ずしも明らかではなかったが、陸奥湾東部のいくつかの河川河口部では生息が分かっている。しかしなお、両種の県内での分布状況の詳細は明らかでない。

(佐原雄二)

ニシン目 ニシン科**LP (尾駮沼系群)**

和名 ニシン

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（太平洋側湖沼系群）

学名 *Clupea pallasii* (Cuvier et Valenciennes)

[形態的特徴] ニシンはイワシに似るが斑紋がなく、体型は左右に側偏している。本系群については頼（1978）が、セキツイ骨数や頭部紋様など様々な点で独自なものであると述べている。

[選定理由] 本系群を含めて、湖沼に入って繁殖するニシンはそれぞれに地域性が強い（小林ら、1990）。本系群は近年資源量が著しく減少しているという。

[分布と生態の概要] 尾駮沼系群は尾駮沼で産卵し、北海道の太平洋側で採餌しながら回遊する。冬に尾駮沼に遡上して、藻類などに産卵する。ある程度以上に成長した個体はアミ類など小型無セキツイ動物や小魚などを食う。

[生存に対する脅威と保存対策] 尾駮沼の周囲は核燃料サイクル関係施設の集中立地によって環境が激変した。本系群に対する影響も当然あったと考えられるが、その実態は明らかではない。

[特記事項] ニシンの中には、湖沼に入って産卵する系群がいくつか知られている。このような湖沼ニシンの中でも尾駮沼に入るニシンは古来漁獲の対象として重要であったが、近年、周囲の環境の激変によって大きく減少した。

(佐原雄二)

サケ目 サケ科**LP (大畑川陸封型群)**

和名 サクラマス（通称スギノコ）

環境省：準絶滅危惧

学名 *Oncorhynchus masou masou* Brevoort

[形態的特徴] 頼（1982）によれば、通常のヤマメに比べ、青緑色を帯びているなど体色の違いのほか、幽門垂の数などにも違いが認められるという。

[選定理由] 本個体群は生息が地域的に限定され、学術的にも貴重なものである。

[分布と生態の概要] サクラマスとヤマメは同じ種に属し、降海するものはサクラマスとなるが、河川にとどまるものをヤマメという。陸封されたヤマメ個体群はそれぞれ生息水系ごとに色彩や形態に微妙な違いがあり、大畑川に陸封された本種は「スギノコ」と称され、青みがかった体色など独自の形質を備えている。

[生存に対する脅威と保存対策] 本個体群は大畑川の上流の一部にのみ生息する。河川だけでなく周囲の自然全体を守ることが必要である。

(佐原雄二)

コイ目 コイ科**LP (大和沢川透明鱗群)**

和名 アブラハヤ

環境省：該当なし

学名 *Phoxinus lagowski steindachneri* Sauvage

[形態的特徴] アブラハヤは全長最大13cm程度の魚だが、個体数も多く近年では水系内でも生息域を広げつつある（佐原・福井、2001）。本個体群は体表の黒色素が少なく、鱗が透明で鰓蓋からは鰓の赤い色が透けて見える。

[選定理由] アブラハヤは本県が国内北限の魚で、岩木川水系平川の支流大和沢川に生息する本個体群には透明鱗個体が多く含まれ、このような個体の割合が異例に高く特異的である事例は他に報告がない。

[分布と生態の概要] 国内では本県以南本州の北陸および中国地方まで、国外では中国東北部・朝鮮半島・沿海州に生息する。雑食性で昼行性というよりもむしろ薄明薄暮に活動する性質が強い。

[生存に対する脅威と保存対策] 本個体群の生息を脅かすのは河川改修など河川内工事である。

(佐原雄二)

和名 ウグイ

環境省：該当なし

学名 *Tribolodon hakonensis* (Günther)

[形態的特徴] ウグイは大抵の河川に普通に見られる魚種で全長30cmに達する。本個体群の特徴として、サイズが小さく20cmを超えるものは少ないようだ。また、鰓の塩類細胞がよく発達するなど特異な形質を持つ。

[選定理由] 宇曾利山湖は強い酸性の湖でpHは3に近い。このように極端な条件で生活する魚は他に例がなく、貴重な事例といえよう（山本ら, 1969）。本個体群は宇曾利山湖にのみ生息する。

[分布と生態の概要] ウグイはほぼ国内全域に分布し、国外では沿海州や朝鮮半島、サハリンに生息する。また、河川の上流域から河口まで広く生息する。宇曾利山湖の本個体群は繁殖の際には流入河川を遡って産卵・放精を行う。

[生存に対する脅威と保存対策] 流入河川さらには森林など、湖だけでなくその周囲の環境全体の保全をはかることが肝要であろう。

(佐原雄二)

③引用文献

- 青森県 1978. 第2回自然環境保全基礎調査. 動物分布調査報告書 (淡水魚類). 青森県. 57pp.
- 青森県鮭ヶ沢県土整備事務所 2004. 磯崎川の生き物たち. 青森県. 124+63pp.
- 東 幹夫 1998. 移入された淡水魚による生態系の攪乱. 遺伝, 52: 28-32.
- 日下部元慰智 1988. 青森県さかな博物誌. 東奥日報社. 377pp.
- 小林時正・岩田宗彦・沼知健一 1990. 日本の北部海域で産卵するニシン地域性集団間の遺伝的分化. 日本水産学会誌, 56: 1045-1052.
- 長崎勝康・佐原雄二・松宮隆志 1999. 津梅川で採集されたアユカケの記録. 青森自然誌研究, 4: 34.
- 頼 茂 1978. 尾駮沼鯿 (湖沼性ニシン) について. 淡水魚, 4: 82-87.
- 頼 茂 1982. 大畑川のスギノコ. 淡水魚増刊, pp. 97-103.
- 佐原雄二 2003. 移入生物 淡水魚. 青森県史 自然編 生物. 青森県. pp. 673-678.
- 佐原雄二・福井庸雄 2001. 土淵川の魚類—20年前との比較. 青森自然誌研究, 6: 105-107.
- 竹内 基・松宮隆志・佐原雄二・小川 隆・太田 隆 1985. 青森県の淡水魚類相について. 淡水魚, 11: 117-133.
- 山本護太郎・檜村利道・吉田勝一・関野哲雄 1969. 下北半島における陸水生物学とくにプランクトンと魚類分布について. 日本生態学会誌, 19: 246-254.